

the VEDANTA KYOKAI

日本ヴェーダーンタ協会の最新情報 2006年3月 第4巻 第3号

目次

- ・かく語りきー聖人の言葉
- ・3月の予定
- ・2月の例会 第144回スワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会
- ・スワミー、マニラでヴェーダーンタの普遍性について講演
- ・忘れられない物語
- ・今月の思想
- ・スミトラ・ラオ氏を偲んで



かく語りきー聖人の言葉

「母なる神に祈り、不動の愛と揺るぎない信仰心を
くださるようお願いしなさい。」

(シュリー・ラーマクリシュナ)

「信じて祈るならば、求めるものは何でも得られ
る。」

(マタイによる福音書 第21章22節)

3月の予定

生誕日

シュリー・ラーマクリシュナ：

3月1日 (水)

シュリー・チャイタニヤ：

3月14日 (火)

スワミー・ヨガーナンダ：

3月19日 (日)

協会の行事

逗子例会 3月19日(日) 午前10時30分より

シュリー・ラーマクリシュナ生誕祝賀会

CDの披露：

「シュリー・ラーマクリシュナの福音の賛歌」

2月の例会 第144回スワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会

日本語版ギターを披露

2月19日、日本ヴェーダーンタ協会逗子本館の2月例会で、第144回スワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会と新刊シュリーマッド・バガヴァッド・ギターの披露が行われました。講話のテーマは「スワミー・ヴィヴェーカーナンダ 自由のチャンピオン」でした。午前の部は、ヴェーダの朗唱とスワミーの「カルマ・ヨーガ」の朗唱（英語と日本語）で始まりました。続いてスワミー・メダサーナンダは、「シュリーマッド・バガヴァッド・ギター（神の歌）」を協会が出版したことを発表しました。ギターはヒンドゥー教の重要な聖典で、ヒンドゥー語の叙事詩「マハーバーラタ」の一部です。ギターの外国語翻訳版は聖書に次ぐ多さを誇っており、その教えは現代にも通ずる重要なものですが、その真意を汲み取るには掘り下げて読むことが必要なため誤った解釈をされることも少なくありません。マハラージは、そうした誤訳をいくつか挙げて解説しました。

日本語版はこれまでに四、五点出版されていますが、その中で、田中嫺玉さんによる翻訳が現代の読者にとって最も分かりやすいので、協会では今回これを元にして制作・出版しました。また、協会が数年前に発売したオーディオCD「バガヴァッド・ギター」に合わせて朗唱したいという日本人信者の声が多かったため、

サンスクリットの原典をローマ字だけでなくカタカナにも転写しました。これは、ヨーガ・ニケタンの木村慧心先生のご好意により先生の著作権を参考にさせていただきました。

そして、こうしたいくつかの要素を取り入れた翻訳・音訳本を校正するには、サンスクリットやインド文化等に精通した日本人の専門家がが必要です。そこで、協会の古くからの友人であり良き支援者である奈良毅教授にご監修をお願いしました。

奈良先生はご退職後、その卓越した専門知識を求めて各所から協力の依頼が後を絶たないのですが、スワミーはその様子について、「水もただでは手に入らないこの日本にいながら、こうした依頼は報酬もお支払いしない『お願い』であることがほとんどです。この本についても、協会からの『お願い』でした。」とおどけたように言いました。先生は二年間この本の監修を担当され、非常にご苦労されたそうです。また、先生の元生徒さんや校正者の皆様にもご協力をいただきました。スワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会を行う2月の逗子例会で本書を披露すると決まっていたので、印刷の締め切りに間に合わせるため徹夜で作業して下さった方もいらっしゃいました。

奈良毅教授のお話

スワミーは、本書の発刊は神の御意志であると言い、大変なお願いを引き受けて下さった奈良先生を始め、この本の発刊に当たり無私の奉仕をして下さった関係者全員にもう一度お礼の言葉を述べました。そして、奈良先生に一言お話をお願いしました。

奈良先生は日本語と英語でお話をされました。「人間は何かを成し遂げようと努力しても、神のお恵みとお慈悲とがなければ何も為すことは出来ません。今朝、私と家内は早くに家を出ましたが、電車が事故で一時間ほど遅延し、協会への到着が遅れてしまいました。しかし、神のお慈悲により、ここに着くことが出来たのです。」

先生は、当初、翻訳・音訳の監修を六ヶ月で終わらせようと思っていらしたそうです。田中嫺玉さんは非常に優秀な翻訳者で、先生はこれまでに田中嫺玉さんと何度もお仕事をご一緒されていましたが、それでも、サンスクリットをまず先生ご自身が和訳し、それを田中さんの翻訳と一文ずつ照らし合わせるという作業は非常に時間のかかるものでした。先生は田中さんの訳文

になるべく手を加えず、出来るだけ活かしたいと思われていたからです。

また、カタカナによる音訳も予想をはるかに超える困難な作業で、木村慧心先生がローマ字からカタカナに転写する際のご苦労が偲ばれたものの、音訳にも修正が必要な箇所がありました。奈良先生は、本書の監修をお手伝い下さった多くの方々に感謝の言葉を述べられました。

先生は、実のところ、監修にあまり気乗りしなかったそうですが、これは神のお導きだと感じられたそうです。主はシュリー・ラーマクリシュナを遣わされ、続いてスワミー・ヴィヴェーカーナンダを送られました。スワミー・ヴィヴェーカーナンダは日本に立ち寄られた後シカゴに行き、万国宗教会議 (the Parliament of Religions) で行ったスピーチにより世界的に有名になりました。奈良先生はおっしゃいました。「私は、元々シュリー・ラーマクリシュナのこともラーマクリシュナ・ミッションのことも何も知らず、ただインドの言語を学びたいと思っていただけでした。そして東京外国語大学で日本の文化と仏教を学ぶ三人のインド人生徒に出会い、その一人がたまたまラーマクリシュナ・ミッション・カレッジの第一期卒業生だったのです。」

「ですから、私が意図したものではありません、神の摂理、神のご意志によるものだったのです。また、翻訳を始めた時、自分がアルジュナとなってシュリー・クリシュナと対話しているかのように感じられました。私にとっては心沸き立つ経験でした。」スワミーは、大切な儀式を始める時間になりましたので、と冗談を言いながら、奈良先生と一緒にカメラに笑顔を向けました。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダ 自由のチャンピオン

スワミーは笑いながら、「今日の講話はスワミー・ヴィヴェーカーナンダがテーマですから、この重要なテーマについて話すにあたり、宿題としてかなりの準備をしました。しかし、昼食までもうあまり時間がありません。これで、来年の講話は事前の宿題が少なく済みます。」と言いました。そして、こう付け加えました。「奈良先生がおっしゃったように、これもまた神のご意志なのです。」

スワミーは、「スワミー・ヴィヴェーカーナンダ自由のチャンピオン」というテーマには多くの意味が込められていると言いました。「チャンピオン」という

語は日本語でもそのまま使われていますが、この語にもいくつかの意味があり、例えば、「擁護者、闘士」など、あることに共感し、それを実践・追求する人を指す場合もあります。「自由にも様々なものがあります。政治的自由、経済的自由、社会的自由、言論・出版の自由、司法の自由、女性の解放と自由、などです。しかし、これらの自由の目的地である真の自由、これらの自由を導く真の自由とは、心の自由と魂の自由です。」

「スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、自らの人生と教えの中で、心と魂の自由の大切さを説き、誰もが心と魂の自由を体験すべきだという考えを抱いていました。ここで言う自由とは、執着、世俗的な欲望、惑わし、無知からの解放や、欲、怒り、恐れ、憎しみ、虚栄心、慢心などの感情や衝動からの解放・自由を指します。そして、魂の真の性質に目覚めることです。」

「これが心と魂の自由です。スワミーは、心と魂の自由は私たちの生得権であるとおっしゃいました。一匹のアリでさえも、自覚のあるなしにかかわらず、この自由に向かって進んでいるのです。束縛を好む者は一人もいません。自由を手にして初めて愛や喜びを手にすることが出来るのです。本日朗唱した本には、私たちが通常体験する愛とは、奴隷の愛であり、真の愛は自由なくして得ることは出来ないと書いてありました。真の自由がなければ、真の愛、真の同胞愛、真の平等、真の理性、真の知識は存在しないのです。」

「現代文明とフランス革命はどちらも四つのことを重視しています。自由、平等、博愛、そして知識に至る合理主義です。しかしこれらはどれも、人間性を部分的に捉えた発想に基づいています。自由と平等の名の下に、世界各地で多くの血が流されてきましたが、これはその理想が普遍性に基づいていないためです。」

「これらの理想に共通する普遍的なものとは、『自己』の思想です。この自己とは、普遍的な愛、自由、平等、理性主義を含みます。自己という理想を重視すれば、自由、平等、博愛の理想を自然に譲り受けることになるのです。だからスワミー・ヴィヴェーカーナンダは、自己の思想を強調したのです。そうすれば真の自由がもたらされるのです。」

「スワミーは、慣習、執着心、惑わしや妬みなどの些細な事柄には全くとらわれることがありませんでした。その例をお話ししましょう。ある時、スワミーの弟子のアイランド人女性、シスター・ニヴェーディタ (Sister Nivedita・本名Margaret Elizabeth Noble)がスワミーに手紙を書き、ラビンドラナート・タゴールなど彼女の著名な友人らをスワミー

ジが妬んでいると非難しました。スワミーはこう返信しました。『マーガレット、私は自分に不徳な点があるのは分かっているが、嫉妬心は全くない。』スワミー・トゥリヤーナンダは、スワミーが嫉妬するなどあり得ないと言いました。というのは、人は自分の同輩や上位にある者を妬むのだから、『ヴィヴェーカーナンダに匹敵する者がいるのだろうか?』と考えたわけです。この説明に疑問を持つ人もいますが、高度な哲学レベル、例えばギターの中では、このように言われているのです。『自らの中にすべての他者を見、すべての他者の中に自らを見る者が、どうして他者を妬むことが出来ようか。』スワミーはすべての人の中に同一の自己を見えています。すべての人の中に同一の存在を見るのですから、自分で自分を妬むことは出来ないわけです。」

「また、スワミーが誘惑からも自由であったことを示す例もお話ししましょう。スワミーは青春期にアメリカで説教をしたわけですが、男性としても非常に魅力的であったため、欧米の女性信者の中には女性の隠れた動機に注意するようスワミーに忠告した人もいました。それに対しスワミーはご自分の実体験を話されたそうです。スワミーが招待を受けてインドの宮廷に行くと、君主や皇太子が非常に美しい侍女を部屋に寄越して、スワミーを夜通しうちわで扇ぐよう取りはからってくれることがしばしばあったと説明し、『私は誘惑というものを知っていますから、どうぞご心配なく』と言ってこうした信者らを安心させました。」

「スワミーには弱さや妄想のような人間の悩みの種になる部分が全くなく、あらゆる束縛から解放されていました。あの偉大なマハーマーヤは、執着や欲望のロープで常に私たちに縛ろうとします。著名な俳優で劇作家のギリシュ・チャンドラ・ゴーシュはシュリー・ラーマクリシュナの弟子でしたが、スワミーのことを評して、『マハーマーヤでさえもスワミー・ヴィヴェーカーナンダの無限性を縛れるほどのロープは持ち合わせていなかった』と言いました。長さや幅があり、限界を持つ者だけが縛られるのです。スワミー・ヴィヴェーカーナンダは霊的には無限で限界がなく、普通の人が苦しむような束縛をはるかに超えていたのです。」

「ヒマラヤ山脈のアマルナート (Amarnath) へ行く途中、スワミーはシヴァから恩寵を与えられ、自分の死期を自分で決めて良いことになりました。スワミーは亡くなる前に、付き添いの者に暦を持つ

てくるように言い、日にちを確認すると暦を返しました。スワミーはアメリカ独立の理念が好きで、7月4日に捧げる詩を書いたことがあるほどでした。後になって分かったのですが、スワミーは暦から、肉体を離れる日として7月4日を選ばれていたのです。」

「スワミーは、チャンピオンという語の持つあらゆる意味において、そして自由という語の究極の意味において、自由の真のチャンピオンでした。」■

スワミー、マニラでヴェーダーンタの普遍性について講演

(スワミー・メダサーナンダは、2月11日～13日に五回目のフィリピン訪問を果たしました。霊的なアドバイスを求める方達と内輪で会合を開き、2月12日の午後遅く、「普遍の宗教 ヴェーダーンタ」というテーマで二時間の講話をしました。)

ヴェーダーンタの意味

スワミー・メダサーナンダは、明るい雰囲気です講話を始め、2月の寒い日本から来た身には、短い間でもマニラのこの暖かさにホッとしますと言いました。また、マニラの気候を肌で感じたり果物の木を見たりするとインドのことを思い出すので、再びこの地を訪問することが出来て幸せですと言いました。

過去4年間の講話のテーマとは違い、本日のテーマは宗教への今までにないアプローチであり、おそらく耳新しいものに思われるでしょうとスワミーは言い、参加者の皆様にヴェーダーンタについての説明をよく聞いて下さいとお願いしました。特に、フィリピンにはヴェーダーンタ協会を設立しようとしていらっしゃる信者の方がいらっしゃるのので、「ヴェーダーンタ」の意味を理解することは非常に重要なのです。

「フィリピンでは『ヴェーダーンタ』の概念はおそらく知られていないでしょうが、他の国々、特に欧米諸国では百年前から既に知られています。『ヴェーダーンタ』とは『ヴェーダのゴール』という意味で、インドの古代の聖典を源とする『ヴェーダ(Veda)』と、最後、ゴールを意味する『アンタ(Anta)』という二つの語から出来ています。」

「ヴェーダはさらに、『神の知識、聖なる知識』を意味します。ヴェーダの聖典は、特定の神の化身について

単に記録したものではありません。この点で、イエス・キリストや預言者ムハンマドの教えを記録した聖書やコーランとは異なっています。ヴェーダの書には特定の著者がいません。悟りの結果であり、その内容である霊的真理と同じく不変で永遠のものです。」

「このような真理は、宇宙の誕生と共に賢人の心の中で明らかにされます。そして、一周期が終わると共に宇宙は溶けてその形を失い、ヴェーダは粗大な状態を終え精妙な形を取るのです。」

スワミーは、こう強調されました。ヒンドゥー哲学によれば、宇宙は「創造」も「破壊」もされず、ただその状態を精妙なものから粗大なものへと変え、やがてまた精妙な状態に戻るだけで、言い換えれば、始めにその姿が映し出され、やがてフェードアウトし見えなくなっていくのです。宇宙はこのように、その姿が表され、維持され、見えなくなっていくという周期を繰り返しているのです。

スワミーは続けました。「ヴェーダは三つの部分から成っています。一つ目は儀式に関するもので、様々な儀式、供物や生贄の献上（キリスト教を含めすべての宗教には儀式がある）を行うことで祈願を成就することを目的としています。二つ目は『マントラ』すなわち聖なる言葉に関するもので、神々を礼拝することを目的としています。三つ目は哲学や知識に関するもので、ウパニシャッドと呼ばれています。」

「ヴェーダーンタ哲学はウパニシャッドに基づいています。『ウパニシャッド』とは『先生の側に座って勉強する』という意味で、知識は本から学ぶことは出来ず、霊的真理を弟子に授ける力を持つ師の側にいることで初めて得られるのだということを示しているのです。」

「ヴェーダの起源は少なくとも五千年前にさかのぼります。この長きにわたる間に、ウパニシャッドの一部は忘れ去られ失われました。残った部分は今日非常に有名になっていますが、それがヴェーダーンタ哲学の基盤となっているのです。」

東洋と西洋の哲学の違い

続いてスワミーは、現代の西洋哲学とインド哲学・東洋哲学の大きな違いについて出席者に説明しました。どちらも真理を追究するものですが、西洋の思想家は知性や知識のみで真理に到達しようとし、一方、東洋やインドでは、自己の全存在を通じて真理を追究します。西洋の哲学者は、知性で真理を理解すれば満足ですが、インドや東洋では、真理とは自己の全存

在や人生を通じて知覚し、理解されなければなりません。ですから、西洋では実践（宗教）と理解（哲学）は区別されています。

「東洋ではどうかといえば、ヴェーダーンタにはそのような区別はなく、哲学と宗教は同一で、真理は実践と理解の両方を通じて追求されます。真理は実感により理解されるべきものです。西洋では、哲学者とは高度な知性がある人と見なされ、その私生活は関係のないかも知れません。知性と清い生き方を通して真理が追求されるインドや東洋であれば、そのようなことはあり得ないでしょう。」

「ヴェーダーンタは六つのインド哲学の中でも最も有名なものであり、インドの社会や歴史に数千年にわたって大きな影響を与え続け、そのおかげでインドは外国の侵略を耐え抜いてきたのです。他の地域では、外国の侵略者がその国の土着の宗教を完全に破壊し、例えばアメリカ大陸やオーストラリアなどのように、先住民の宗教を侵略者独自の宗教で入れ替えた例もありますが、インドではイスラム教徒やイギリスの侵略を受けながらもインドの文化や宗教が破壊されることはありませんでした。ヴェーダーンタこそインドが立ち直る原動力となってきたのです。」

ヴェーダーンタの普遍性

「既にお話しした通り、ヴェーダーンタはアメリカ、ヨーロッパ、アジア諸国など世界の多くの地域で深い関心を寄せられました。各地で、異なる宗教を持つ人がヴェーダーンタに好意を持ち、それまでの信仰を持ち続けながらヴェーダーンタを積極的に学んでいます。キリスト教や仏教の信者の多くがヴェーダーンタを学んでいます。西洋の教会の中には、スワミーを招いてヴェーダーンタについての講話を教会の信者に聞かせているところもあります。いつの日かフィリピンでもそうなることを願っています。」

「知識人や進歩的キリスト教徒、仏教徒、そしてイスラム教徒にさえもヴェーダーンタが受け入れられその興味を惹きつけるのはなぜか。それは、ヴェーダーンタが非常に合理的な手法を用いているからです。ただし、悟りに関することなどでは、合理主義を超越した部分もあります。」

「ヴェーダーンタはまた、普遍的です。カリフォルニア州ハリウッド・ヴェーダーンタ・ソサエティのインド人僧がこれについてこう言ったことがあります。『イエス、ブッダ、ムハンマド、クリシュナをもし同じ部屋に

集めたら、彼らは互いに抱き合うだろう。しかし、もしその部屋にそれぞれの信者を四人ずつ入れたら、言い合いが始まり、おそらくケンカになるだろう。』」

スワミーは、諍いが起こるのは、宗教の本質よりむしろ本質以外のことを必要以上に重要視する時だと強調しました。同様に、宗教の精神についてではなく儀式や形式が重んじられると、争いが起こるのです。

「では、宗教の精神、真髄とは何でしょう。神への愛、心の清らかさ、そして他人への奉仕です。どんな宗教にもこれらすべてがあります。ヴェーダーンタは宗教の外面的な部分ではなく真髄を重視しています。ヴェーダーンタでは、『ただ一つの宗教だけが本物で聖人を生み出し、他の宗教は本物ではなく聖人など生まれえない』などとは考えません。ヴェーダーンタでは、すべての宗教が神を悟る道であり、これがヴェーダーンタの普遍性なのです。」

「ヴェーダーンタには次のような美しい例えがあります。『様々な川が様々な源から湧き出でて大海へと流れ込み、その水を一つにするように、様々な性質を持ち見た目も異なる様々な人々が、曲がりくねった道、まっすぐな道などそれぞれの道をたどり、皆やがて神のもとにたどり着く』というものです。」

ヴェーダーンタでは、すべての宗教の預言者や神の化身を受け入れ敬意を表します。ヴェーダーンタでは神を悟る様々な方法も受け入れます。強い信仰心、無私の奉仕作業、瞑想などです。」

現代世界のためのヴェーダーンタ

「コミュニケーションとグローバリゼーションが急速に進む現代の世界で、ヴェーダーンタは、様々な文化や宗教の関係に調和を生む方法を示すと同時に、違いは現実に存在し、存在すべきであると考えています。ヴェーダーンタには次のような言葉があります。『いかなる違いがあろうとも、汝らの霊はひとつ』であり、『多様性の中での統一』を分かち合う。」

「結局、ヴェーダーンタは非常に進歩的で、特に霊的なのです。悟りを得ることが第一の目的であり、社会活動に限定することはありません。これは、いくつかの他の宗教で行われている活動との違いです。ヴェーダーンタは次のような根本的な疑問を提起します。『神の真の性質とは何か？』『この宇宙の真の性質とは何か？』『人間の真の性質とは何か？』『神、宇宙、私たちという三つの要素の関係とはどのようなものなのか？』ウパニシャッドは非常に重要なことを示唆してい

ます。『汝を知れ』と。ヴェーダーンタはこれらの疑問を独特の切り口で扱っています。」

「まず初めに、目に見えることと本当のことの違いを理解しなければならない、また、相対的なことと絶対的なことの違いを理解しなければならない、とヴェーダーンタは教えています。空が青い、と言いますが、空の色は本当に青いのでしょうか。違いますね。空は青く見えるだけです。太陽は小さな円に見えますが、本当に小さいのでしょうか。違いますね。本当は非常に大きなものです。」

「コペルニクスは、地球が太陽の周りを回っていると初めて唱えた人です。それまで信じられていた『本当のこと』とは、太陽が地球の周りを回っているということでした。コペルニクスは真実を唱えて目に見えることを否定し本当のことを明らかにしたために、最初、批判にさらされました。私たちは、見た目にたやすくだまされ、真実を無視してしまいます。ヴェーダーンタは私たちに、自らの知覚に疑いをもち識別するよう促します。私たちが感じていることは本当のことなのかそう見えるだけなのか、自分に問いかけるのです。」

「同様に、ヴェーダーンタは相対的なことと絶対的なことを識別するように説きます。例えば、生と死です。相対的な面から見れば、私たちは生まれ、死にます。しかし絶対的な面から見れば、肉体が生まれて死ぬだけであり、私たちの自己、魂は生まれることも死ぬこともないのです。」

「ヴェーダーンタの提起する根本的な疑問に、『神の性質とは何か?』というものがあります。ヴェーダーンタでは、神は至高の実在、純粹意識であり、サンスクリットで言うブラフマンです。聖典では、神は無限です。最も小さいものよりも小さく、最も大きなものよりも大きいのです。興味深いことに、ヴェーダーンタの無限の定義は、科学における無限の定義と一致します。」

「神とは、『サット』『チット』『アーナンダ』、すなわち絶対なる実在、絶対なる知識、絶対なる至福です。神に当てはまる『絶対』という概念は、人間に当てはまる『相対』という概念に相反するものです。」

「人間は百年ほど生存し続けますが、必ず終わりが来ます。ですから、時間と空間に左右される相対的な存在と言えます。(肉体は一度に異なる二箇所が存在することは出来ません。)人間の知識も、同様に有限です。

(偉大な科学者であるアインシュタインでさえその知識は科学に限定されており、例えば、シェークスピアに匹敵する文学的才能があったわけではありません。)同

じく、人間の喜びや至福も相対的であり時間などの要因に左右されるのです。」

「ブラフマンは無知、束縛、惑わしとは無縁で、人間とは反対です。ブラフマンには、様々な組み合わせで常に人間に現れる三つの性質、サットワ(sattva)、ラジャス(rajas)、タマス(tamas)がありません。サットワとは安定、平静を示し、それらを導く性質です。ラジャスは活動を通じて私たちを束縛する性質、タマスは怠惰や不活発を導く、破壊的な性質です。」

「ヴェーダーンタでは、私たち自身の意識はブラフマンの意識を通じて可能となり、同様に、神の意識があるからこそ宇宙とその森羅万象(太陽、光、水など)が存在し機能することが出来るとされています。月は太陽の光を『借りて』いるのと同じく、人間の意識はブラフマンの意識の反映なのです。」

「聖典には『神はすべての中にあるのではない。神はすべてのものなのだ』と書かれています。しかし、ブラフマン、すなわち純粹意識であり極めて精妙なものが、宇宙のような非常に物質的なものをどのように創造したのでしょうか。バンヤンという大きな木があります。昔、ある先生が生徒に、巨大なバンヤンになった小さな実を二つに割ってみなさいと言いました。そして、その中に何が見えるか生徒に尋ねました。『先生、種しかありません』と生徒は答えました。すると、先生は生徒に、その種を一つ取り出して割り、中に何が見えるか尋ねました。生徒は、何も見えないと答えました。しかし、先生はこう説明しました。『巨大なバンヤンの木の、小さな小さな種の中には、精妙な状態となった木の本质、すなわち木そのものが入っているのです。』」

「この宇宙では、なぜブラフマンを見ることが出来ないのでしょうか。それは、『名前』や『形』という要素があるため、物や人はそれぞれ別個のものだという印象を私たちが持っているからです。もし、名前や形というものを取り除くことが出来れば、すべての物や人の中に同じ意識が内在し満ちあふれているのが見えるでしょう。それがブラフマンです。例えば、イヤリングやネックレスなど金の装飾品の違いは形や名前から生まれます。金細工職人がこれらの装飾品を溶かせば、内在していた本質である金になるのです。」

「このように、ブラフマンを見つける方法は、名前と形を分析し消去することにあります。ヴェーダーンタの根本的な疑問である、私たち自身の真の性質とは何かということに立ち返り、分析、消去、識別というこの手法を同じように当てはめてみましょう。そうすれ

ば、私たちは肉体ではなく、生命力でもなく、感覚でも、心でも、知性でも、エゴ（自我）でもないということが分かります。私たちは純粹意識なのです。イエスはこう言いました。『神の国はあなたの中にある。』この言葉は肉体ではなく霊を指しています。」

自己と至高の实在

「結論として、ヴェーダーンタは存在の同一性を信じています。宇宙に存在する至高の实在は、私たちの中にも存在するのです。ですから、神や、宇宙、私たちの真の性質とは何か、これらの関係とはどういうものなのか、という質問に対する答えは、私たちは皆、一つに結ばれた霊、純粹意識だということです。なぜ私たちはこのことが理解できないのでしょうか」

「ヴェーダーンタでは、私たちは皆、毎日三つの状態を経験しているとされています。目覚めている状態、夢を見ている状態、夢も見ず寝ている状態です。しかし本当は、トゥリーヤ(Turiya)、すなわち知識・認識・永遠の覚醒という四つ目の状態が存在します。ある状態も夢を見ている状態も同じです。目覚めている状態とは、見かけのものや相対的なものに対する誤った認識により惑わされている状態ですから。靈的な訓練を通してトゥリーヤの状態に達することで、今の私たちの目覚めている状態が本当は夢に過ぎず、私たちは英知、自由、完全、つまりこの世の天国に到達するのだと分かります。」

「トゥリーヤの状態に達するには三つのステップがあります。まず靈的眞実に耳を傾けるのです。私たちの眞の性質は純粹意識だと知るので。二つ目に、そのことについて論理的に考えるのです。思考、問いかけ、分析を用いて頭で理解・納得するのです。そして三つ目が、実践です。瞑想(的を狙って弓を引くように、靈的眞理に心を集中させる)や否定肯定(自分が肉体、心、自我の存在ではないと否定し、自分は純粹意識なのだ肯定する)を通じて、実践するのです。」

「最後に残る疑問は、自分が純粹意識であるということ。なぜ私たちは忘れてしまったのか、ということです。ヴェーダーンタでは、マーヤ(Maya)すなわち靈的無知がその原因で、靈的無知は苦しみから生まれるとされています。靈的無知の有名な例えに、蛇と縄の話があります。『ある農夫が夕暮れ時に村の小道を歩いていると、やがて辺りはすっかり暗くなりました。すると、目の前に蛇が現れました。農夫はびっくりして助けを求めて叫びました。村人がちょうちんと棒を持って助けに

駆けつけると、ちょうちんの明かりに映し出されたのは一本の縄でした。』農夫の恐怖心は無知と現実の誤認から生まれたものです。単なる一本の縄を蛇だと思い込んでしまったのです。同じように、私たちは純粹意識ですが、無知や現実の誤認から自分を肉体や心だと思い込んでいるのです。」

「人はいつ、どうやってマーヤの魔法にかかり自らの完全で純粋な性質を忘れてしまったのかと問います。これに対するヴェーダーンタの答えによれば、この問いそのものが見当違いなのです。問題は、いつマーヤの虜になったのかではなく、どうやってその魔法から抜け出してマーヤの苦しみを味わわないようにするかなのです。」

「ブッダは次のような例を挙げています。もし体に矢が刺さったら、何を考えるでしょうか。『誰が矢を射たのか？なぜ？どうやって？どこから？』などと考えるでしょうか。違いますね。まず初めに考えることは、矢を体から抜き、治療してもらうことでしょうか。痛みをなくすることが第一でしょうか。ですから、いつマーヤの魔法にかかったのかと問うのはもっともですが、ヴェーダーンタはそれには明確な答えを示さず、靈性の修行により魔法から抜け出して苦しみを終わらせることに努力するよう強く勧めています。」■

(マニラのEnrico colomboさん寄稿)

忘れられない物語

恐れへの報酬

人里離れた山間のある王国に、毎年、病の神、恐れ

の神、死の神が三人でやって来ました。ある年、王国の城門に恐れ

の神が一人で来ました。病の神と死の神はまだ来ていませんでした。老門番は、何年もの間恐れ

の神を見ていなかったのもうと気づかず、そのまま恐れ

の神を城門の中へと通してしまいました。数日後、病の神と死の神が城門にやって来

ました。門番は警戒し、こう尋ねました。「病の神様よ、あなた様は何人を捕らえて病気にさせるおつもりか

「いつもの如し。病の神が差し出す者をもらうに過ぎぬ。」

この言葉を聞いて老門番は悲しくなりましたが、神々を食い止めるような力はありません。仕方なく城門の中へと通しました。「どうか今の言葉をお守りください。」

数週間が経ち、病の神と恐れ of 神が城門に戻ってきました。二人は門番を呼ぶと、門を開けて通すよう言いました。

「病の神様、あなた様は何人を捕らえて病気になさったのかね。」老門番は尋ねました。

「九十九人だ。約束通りであるぞ。」

「死の神様よ、あなた様はどうじゃったのかね。」門番は尋ねました。

「三百人はおる。」死の神は言いました。

「何ですと？病の神様が差し出された者だけだとおっしゃったはずじゃのに。」門番は大声で言いました。

「如何にも。だが、私が命を奪った者は、大半が恐れ of 神に捕らえられた者なるぞ。恐れ of 神は我らより先にこの門をくぐっておった。そして、まだ中におる。この分では、すぐにまた私の出番だ。」 ■

(インドネシアの民話)

3月の思想

「現実 is 幻想に過ぎない。だが、いつまでも続く幻想である。」 (アルバート・アインシュタイン)

日本ヴェーダーンタ協会の初代書記長 訪印中にご逝去

二月の例会 午後の部では、日本ヴェーダーンタ協会の創設者の一人で初代書記長を務められたスミトラ・ラオ氏の追悼式を行いました。ラオ氏はインド訪問



中、バンガロールの病院で二月五日に亡くなられました。九十歳でした。

スワミー・メダサーナンダは、ラオ氏が一番好きだった都市・バンガロールで亡くなられたのは不思議な偶然であると言いました。ラオ氏は急に気分が悪くなり入院されたのですが、その後すぐに重

度の心臓発作を起こし帰らぬ人となりました。ラオ氏はスワミー・ヴィヴェーカーナンダとその教えの熱心な支持者だったので、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会と日と同じくしてラオ氏の追悼式を協会で行うことが出来たのも、不思議な偶然であるだけでなくまさに ふさわしいことであると、スワミーは言いました。

現書記の小藺井氏、町田氏、奈良教授、ラオ氏のご子息であるSachchidananda Noma氏が追悼の辞を述べました。ラオ氏について、奈良教授は「自分の信条を堅く守り続ける」人であると賛辞し、「熱意あふれる人」であったと語った人もいました。また、氏のご子息が氏の「頑固」ぶりについて語られると、集会室は暖かな笑いに包まれました。ラオ氏を知る誰もが、氏との永遠の別れを寂しく思うことでしょう。 ■

※日本ヴェーダーンタ協会の創立、およびラオ氏による協会への貴重な貢献については、協会のウェブサイト www.vedanta.jp の"A-bout"のページをご覧ください。



発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木4-18-1

Tel: 046-873-0428 Fax: 046-873-0592

website: <http://www.vedanta.jp> email: info@vedanta.jp

KENB029J